

十津川村における中高一貫教育の実態

大辻彩音

(奈良教育大学 社会科教育専修)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

Actual Situation of Unified Secondary Education System in Totsukawa Village, Nara Prefecture

Ayane OTSUJI

(Social Studies Education Specialization, Nara University of Education)

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

要旨: 子どもの数が著しく減少している奈良県十津川村において、児童数・生徒数も少数である学校現場で現在行われている教育活動の中に「中高一貫教育」がある。十津川村立中学校と奈良県立十津川高等学校が連携し、2001年からスタートしたこの取り組みは、中学校が4校から1校になった現在も続いており、十津川村の地域について調べ学習を行う「ふるさと学」「吉野・熊野学」や、それらの時間で調べたことを合同で発表する「中高合同学習発表会」が特徴的である。また、2018年度に地域連携教育推進組織が発足して、小学校等も含め村全体で一貫教育を行うことが目指されている。

キーワード: 中高一貫教育 Unified secondary education system
調べ学習 Investigative learning
へき地小規模校 Rural small school

1. はじめに

1. 1. 研究目的

奈良県吉野郡十津川村では、少子高齢化のもとで子どもの数が著しく減少している。学校現場では児童・生徒数の減少が著しく、学校統廃合が進んでいる。このような現状を踏まえて、児童生徒数が少ない中で十津川村ではどのような教育が行われているのかを、十津川村における中高一貫教育についてインタビューや文献調査によりまとめ、十津川村の教育の特色について明らかにする。

1. 2. 研究方法

研究の方法は、文献調査とインタビューである。文献調査として、十津川村総務課が毎月発行している「村報とつかわ」のバックナンバー（2013年4月発行の第619号～2019年3月発行の第690号）から中高一貫教育に関する記事を参照した。また、関連する文献を渉猟した。

あわせて、十津川村立十津川中学校および奈良県立十津川高等学校を訪問し、教員へのインタビューをおこなった。インタビュー項目は以下のとおりである。

十津川中学校

・中高一貫教育の目的・内容

- ・中高一貫教育による生徒への影響
- ・中高一貫教育が開始された当初と変わった点

十津川高校

- ・中高一貫教育の目的・内容
- ・中高一貫教育による生徒への影響
- ・中高一貫教育で中学校とどのようなつながりがあるか

1. 3. 中高一貫教育とは

中高一貫教育は、1999年に制度として導入された。実施形態には、生徒や保護者の要望に合わせて、「中等教育学校」「併設型の中学校・高等学校」「連携型の中学校・高等学校」の3種類がある。「中等教育学校」は中学校と高等学校を一つの学校として一貫教育を行うものである。「併設型の中学校・高等学校」は高等学校入学者選抜を行わずに、同一の設置者による中学校と高等学校を接続するものである。「連携型の中学校・高等学校」は、市町村立中学校と都道府県立高等学校などの異なる設置者間でも実施可能な形態であり、教育課程の編成や教育・生徒間交流等の連携を深める形で中高一貫教育を実施するものである（西海・井上、2012）。

中高一貫教育の目的は、中学校から高等学校への入学試験を学力調査の結果以外の資料により行うことができる

ようにし、受験に影響されることなく、ゆとりのある教育を行い、生徒の個性や創造性を伸ばすこととしている。

中高一貫教育では、6年間の教育を計画的・継続的に一貫した形で行うことができる。6年間生徒を継続して把握することができるため、より生徒の個性や優れた才能を発見することができる、中学校1年生から高校3年生まで異年齢集団の交流ができることで、社会性や人間性の育成にもつながるなど、さまざまな利点がある。具体的には、キャリア教育や情報教育について6年間を通して行ったり、総合学習の発表会を中高合同で行ったり、英語の授業を中学校と高校の教員がチーム・ティーチングで行ったり、学校により一つの目標に沿った取り組みが行われている。

中高一貫教育を行った実際の効果としては、異年齢集団における生徒の育成の中で、中学生にとっては高校生が理想像となることや、高校レベルの学習体験をすることで学習意欲の向上につながることなどの効果がある。さらに、教職員の意識改革や指導力向上にもつながるといふ効果もある。しかし、入学者選抜を行わないことにより、学習意欲の継続が難しい、生徒間の学力に差がうまれてしまう、教職員の負担が増えるなどの課題もある（ベネッセ教育総合研究所、2007）。

2. 対象地域（中学校・高校）

対象地域である十津川村は奈良県南部に位置し、面積は672.38㎏で日本の村の中では最も広い。

この村唯一の中学校が十津川村立十津川中学校である。十津川中学校は、2012年3月で閉校した上野地中学校、小原中学校、折立中学校、西川中学校の4校を統合し、2012年4月に開校した。校舎は十津川産の木材を使って建てられた。校区は竹筒という奈良県最南端の大字を除く十津川村全域となっているため、登校にはスクールバスを使う生徒がほとんどである。

同じくこの村の唯一の高校は、奈良県立十津川高等学校である。1872年に十津川高校の前身である「文武館」が開設され、1948年の学制改革により「奈良県立十津川高等学校」となった（奈良県立十津川高等学校文武館百年史編集委員会編、1963）。生徒数は2019年5月22日現在で、1年生35名、2年生26名、3年生24名であり、中には和歌山県から通学する生徒もいる。普通科の中に2つのコースがある。ひとつは、「十津川地域の豊富な自然や歴史、文化にふれながら、寮生活も行える落ち着いた環境の中で、木工芸や絵画・彫刻等についての知識・技術を学べ」る、木工芸・美術コースである（十津川高等学校ウェブサイト）。2018年度入学生までは工芸コースであった。もうひとつは、「十津川村で生活して吉野熊野地域について学習し、地域と連携しながら将来の県南部地域を担う人材を育成」する、ふるさと共生コースである。いずれも2年生からさらに2つの類型に分かれて学びが深められている。



図1 十津川村立十津川中学校 外観
(2019年8月25日、大辻撮影。)



図2 奈良県立十津川高等学校 外観
(2019年8月25日、大辻撮影。)

3. 十津川村における中高一貫教育

十津川村における中高一貫教育は、2001年に旧上野地中学校、旧小原中学校、旧折立中学校、旧西川中学校の4校と十津川高校との間で、連携型中高一貫校としてスタートした。

十津川村においては中学校と高校の連携により生徒間・教員間の交流を深めることで、思春期を迎え、不安定になりがちな子供たちを6年間安定的に育てることを中学校・高校ともに目的としている。十津川村の豊かな自然の中で中高6年間の計画的、継続的及び相互交流の教育を通して、基礎的・基本的な内容の確実な定着と学力の向上を図り、地域の調べ学習などから十津川村という地域に対する誇りを育てることも目指している。

ここからは中高一貫教育で行われていることを以下に具体的に述べていく。

中高一貫教育が始まってから続けられていることに、中高合同総合学習発表会と中高合同文化講演会がある。

中高合同総合学習発表会は毎年1月に行われ、中学校は

「ふるさと学」と題した地域学習の時間に調べたことを、高校では「熊野・吉野学」と題した地域学習の時間に調べたことを合同で発表するという会である。調べたことをわかりやすく発表することや、質疑応答で内容を深めたり中学生と高校生が交流を深めたりすることができる。2013年の合同発表会での取り組みでは、十津川村の食材を使って料理を作ったり、十津川村で生活していても十津川村に関する歴史を知らなかったことから、玉置神社の歴史や成り立ちについて調べたり、「我らが十津川観光隊」という名で十津川村の観光パンフレットを作成したり、様々なことを生徒主体で行い発表の場が設けられている（村報2013年12月号）。

高校生の「吉野熊野学」は、郷土教育としての調べ学習にとどまらず、課題解決型の学習に発展してきた（岩嶋、2012）。十津川高校のウェブサイトには、以下のように記されている。

” 地方へのIターンUターンが見直される中で、「地域の課題」を「地域のポテンシャル」に変える力が求められています。十津川高校は、課題を発見し、問いを作り、探求を深めていく力が、来るべきAI時代であっても活躍できる「人間力」につながっていくと考えています。

本校は、紀伊山地の霊場と参詣道として、世界でも珍しい「道」として世界遺産に登録された「大峯奥駈道」と「熊野参詣道小辺路」の間にあり、また豊かな自然に囲まれた学校です。

「吉野熊野学」は吉野・熊野に関することを「歴史」「文学」「文化」「芸術」「自然」「食物」「住居」「科学」「福祉」「健康」「国際」「林業」「観光」「教育」「交通」の中からテーマを選び6つの班に分かれて学習しています。一年を通じて、調査・体験・制作を行い、年に一度、村内の中学生・村の方々むけて成果の発表会を行っています。

今後ともこの「吉野熊野学」を一層充実させ、この豊かな自然の恵みの中でより輝いた生徒の育成に更に取り組んでいきます。”

中高文化講演会は、毎年10月に行われている。中学校と高校の生徒会が定期的に集まって生徒主体で企画をし、さまざまなジャンルの団体を呼び鑑賞会を行っている。具体的には、阪神タイガースの捕手であった矢野さんを招き、生徒たちへの将来についての講演（村報2011年7月号参照）や、落語家の三遊亭究斗さんのミュージカル落語の鑑賞（村報2015年7月号参照）等がなされた。2019年度は不登校バンドを招き鑑賞会を行う予定である。

表2 中高一貫教育の年間計画（2017年度～2019年度）

| | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 |
|----|-------------|--------|---------------------|
| 6月 | 中高一貫教育生徒交流会 | | 新体力テスト 中高一貫生徒交流会 |

| | | | |
|-----|-----------|-----------|-----------|
| 9月 | | 中高合同文化講演会 | |
| 10月 | | | 中高合同文化講演会 |
| 11月 | 中高合同学習発表会 | 中高合同学習発表会 | |
| 1月 | 中高文化講演会 | | 中高合同学習発表会 |

（十津川地域連携教育推進組織 年間計画より抜粋）

また、6月には中高生徒交流会では、総合学習の位置づけで中高の教員によりスポーツ・音楽・調理などに関連した、このような機会にしかできない講座が開かれた。具体的には「English Cooking」や「百人一首について」などであり、中高学年関係なく、生徒自身が興味を持った授業を受けることができる（十津川高校新聞委員会、2019）。

このような行事だけでなく、スクールバスの発着地で高校生を主体とした挨拶運動が行われていたり、週に1回高校の教員が中学校に英語・数学を教えに行くチームティーチングが行われたりといった、日常的な取り組みもある（十津川高校新聞委員会、2019）。

さらに、2018年には十津川地域連携教育推進組織が設置された。十津川村の学校全体・地域全体で子供たちの教育を行うことを目指して、従来の中高一貫教育の取り組みに小学校も加わるようになった。中高合同文化鑑賞会に内容によっては小学校高学年が参加する、小・中・高合同でスポーツテストを行うなど、十津川村全体での連携が進んでいる。この組織は、十津川村教育長、十津川村教育委員会事務局（教育課長、教育指導主事等）、十津川高校・十津川中学校・十津川第一小学校・十津川第二小学校の校長などからなる推進委員会のもとに、十津川村教育委員会事務局教育指導主事と村内小・中・高の教頭からなる事務局会議が設置され、さらに活動部会（教科等研究部会）として生徒指導、特別活動、総合、学習（英語、数学・算数、理科、体育）が動いている。2019年度は、推進委員会3回、事務局会議9回、特別活動部会6回、生徒指導部会5回、体育部会4回、総合学習部会3回、全員を対象とした十津川地域連携教育教員交流会1回などが行われることになっている。

4. 考察

十津川中学校・高校における中高一貫教育では一般的な連携型の中高一貫教育と比較して、教育・生徒間交流の連携を深めるという点や、6年間の計画的・継続的な教育を行うことで生徒一人ひとりの個性を伸ばすという点では共通しており、中高一貫教育を行う目的の基礎となる部分は一般的な中学校・高校と同様であることがわかる。特に十津川村では生徒数が少ないということから

生徒間交流を深めることは子どもたちのコミュニケーション能力の育成や、学習への意欲を持つために非常に重要な役割を担うことになると考えられる。実際、日常的な挨拶運動から、中高生徒交流会と一緒に授業を受けることや発表会でのふるまいなどを見ることを通して、中学生にとって「先輩たちのようになりたい」という理想像を持ち、一方高校生にとっては交流の機会を持つことで「常に後輩に見られている」という意識を持ち、後輩のお手本になるように周囲に気を配る力もつくだろう。

また、週に1回中学生は高校教員の英語・数学の授業を受けることから、学習意欲や次の学習への見通しを持つことにつながる。このように十津川村での教育は中高一貫教育を行うことによる効果が発揮されている。十津川村ではここにさらに十津川村の豊かな自然を生かし、調べ学習などを行うことにより、十津川村という地域に対する誇りを育てるという目的が加わっていることがわかる。具体的には中高一貫教育が始まった当初から続いている中高合同総合学習発表会のための調べ学習は、自分たちの地域について知ることができ、地域を身近な物として生徒に捉えさせるという目的があるのだと考える。生徒たちはこの活動を6年間続けていくのであるから、自身で調べ発表したことはもちろん、同世代の仲間たちの村への思いも知ることを通して、自然と地域に対する関心や愛着を持ち、一人ひとりが十津川村の良さや課題を考えることができる。この点が十津川村の中高一貫教育の特色であると読み取れる。

最近の取り組みとして、中高合同総合学習発表会の前におこなわれる中高生徒交流会が挙げられる。中学生・高校生が同じ教室で同じ授業を受け、交流を深めていけばお互いに親しみがわき、発表会の際にただ発表する・聞くだけにとどまらず、交流したことのある生徒たちの発表であれば質問をしやすくなり、よりお互いの発表内容を深めることにつながるだろう。

一方、十津川村の中高一貫教育の課題は、中学生・高校生が協力して何か一つの物を作るという活動が欠けていることではないか。発表会だけでは中学生と高校生の活動は別々になってしまう。また鑑賞会は鑑賞のみにとどまりあまり交流する点が見つからない。異年齢間で何か一つのものを協力して作るためには、多くの話し合いを必要とし、異年齢間のそうした話し合いは社会にでたときに必ずだれもが会おう場面となる。今後も中高一貫教育を進めていくにあたって、中学生と高校生が協力して発表・活動の場面を設けることで、子どもたちにとってさらに良い影響を与えるのではないかと考える。

また、十津川村では小中高を通じた地域学習の体系が十分に構築されていない。へき地学校では、地域学習を核にした形で、ESDで育みたい資質・能力を考えた体系的なカリキュラムとそれを支える体制を構築することで大きく可能性が開かれる(河本、2020)が、十津川村で

はそれを構築するための体制は整いつつある。教職員や児童・生徒、そして地域社会にとって無理の少ない持続可能な形を、模索すべき時期になっている。

5. まとめ

十津川村の学校教育では、生徒数が少ないことを生かして、中学校と高校がより密な連携を図れるよう、中高一貫教育の取り組みを行っている。特に十津川村の地域資源を利用し自分たちが住む地域に愛着を持たせ、調べ学習を通して課題を見出す力や問題を解決する能力を育てるという点に、十津川村ならではの教育方法が見いだせた。

とはいえ、今回の調査ではインタビューにおいて中学校・高校それぞれ少数の教員にしかお話を伺えなかったことや、生徒へのインタビューができなかったことから、十津川村の中高一貫教育について偏った見方となってしまうことが課題である。また、今回は中高一貫教育に直接かかわる教育活動しか調査できておらず、十津川村の教育全体の特徴を捉えることはできていない。今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆にあたりご協力いただきました、奈良県立十津川高等学校の大塚教頭先生並びに教職員の皆様、十津川村立十津川中学校の前木教頭先生並びに教職員の皆様、関係する十津川村在住の皆様へ、心より感謝申し上げます。なお、本研究は十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施しました。

参考文献

- 岩嶋紀明(2012),「地域の課題、『吉熊学』で発見!—第34回時事通信社『教育奨励賞』推薦校の実践 奈良県立十津川高等学校—」,内外教育, 2012年1月1日号, pp.31-32.
- 河本大地(2020),「ESDでみるへき地教育の在り方」,日本教育大学協会研究年報, 38, pp. 91-103.
- 十津川高等学校ウェブサイト <http://www.e-net.nara.jp/hs/totsukawa/> (2019年10月27日閲覧)
- 十津川高校新聞委員会(2019),十津川高校校内新聞「十津高新聞」, 2 (2019年6月26日発行).
- 奈良県立十津川高等学校文武館百年史編集委員会編(1963),文武館百年史,奈良県立十津川高等学校文武館百年史編集委員会.
- 西海達也・井上真彰(2012),「神奈川県公立中高一貫教育に関する調査—連携型中高一貫教育校における取り組みを中心に—」,神奈川県立総合教育センター研究集録, 31, pp.55-62.
- ベネッセ教育総合研究所(2007),「小中一貫・中高一貫の

実践校に見る課題と展望—子どもたちの実態と地域の特性に応じた教育システムを探る 小中一貫：広島県呉市立二河中学校・五番町小学校・二河小学校 中高一貫（連携型）：三重県立飯南高校・松阪市立飯南中学校・飯高西中学校・飯高東中学校—」, BERD, 7. https://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2006_07/fea_ikkan_01.html (2019年10月27日閲覧)